様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２５ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｈ００８８５

研究課題名（和文）ポップカルチャーから見る日本企業の組織と個人のイメージ

研究課題名（英文）The Image of Japanese corporate organizations and individuals through pop culture

研究代表者
鈴木　竜太（SUZUKI, Ryuta）

神戸大学・経営学研究科・教授

研究者番号：８０２９５５６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　5,200,000円

研究成果の概要（和文）：1970年代から登場するお仕事マンガ、サラリーマンマンガを分析し、日本人の働き方や会社との関係、仕事観などについての変化と時代による違い、現在の日本人の特徴について考察した。また、あわせてマンガをデータとして使用することについての方法論的検討を行った。その中では、例えば日本人の労働エートスとして、2つの点が見出せること、働きがいやワークエンゲージメントの負の部分があることなど既存の方法では得られない新たな視点が見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究成果の学術的意義についてはマンガという媒体を経営学研究のデータとして捉えうることを示した点にある。新しいデータはこれまでのデータでは見出せなかった点を見出すことが可能になる点を持っていることから方法的な基盤を提供したことは学術的な意義があると考える。社会的な意義としては、近年の働き方改革やコロナ禍での働き方の変容、ダイバーシティの重要性が言われる中、新たな産業構造下での新しい働き方を検討する上で、世論をリードするマンガからそれを読み解き、示した点は社会的にも意義があると考える。

研究成果の概要（英文）：O-shigoto manga and salaryman manga that have appeared since the 1970s were analyzed to examine changes and differences over time in the way Japanese people work, their relationship with their companies and their views of work, as well as the characteristics of Japanese employee today. At the same time, methodological considerations were made regarding the use of manga as data. In this process, new perspectives were found that could not be obtained using existing methods, such as, for example, the fact that two points can be found in the Japanese employee’s ethos and that there are negative aspects of job satisfaction and work engagement.

研究分野：経営組織論・組織行動論

キーワード：マンガ　働き方　日本的経営　モチベーション　組織と個人の関係　リーダーシップ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究の学術的背景としては２つの点から考えることができる。１つは、日本的経営論あるいは組織行動論や人的資源管理論で議論されてきた、日本的経営における組織と個人の関係の点からである。多くのデータと分析を用いた日本企業における組織と個人の関係の特徴は、その多様性を断片的に示すことには成功しているが、一方で、総体としての現在の日本企業で働く人々の組織と個人の関係の有り様を理解しづらくしている。また、各種の特徴的な企業制度から読み解くアプローチも組織と個人の関係に潜む心的状態を読み解くことまでは難しい。部分的な特徴や近年の変遷を見出すことはできても、価値観や規範を含む包括的な特徴や変遷をアンケートやインタビューなどの一次データから見出すことは難しい。なぜなら一次データにはデータ収集上の制約があるため、データと分析の範囲がフォーカスしたものになるからである。

本研究は、アンケートやインタビューなどの一次資料に基づく研究ではなく、出版された媒体（漫画）を通して、日本企業の組織と個人の関係にアプローチする。間接的な分析であることによる方法論上、分析上の注意は必要になるが、このようなアプローチを取ることによって、日本企業における組織と個人の関係の様相とその変遷が明らかにすることができると考えている。なぜなら、商業誌に掲載される漫画は、読者からの（様々な意味での）共感を得ることではじめて継続的に作品が続くことから、読者と作者の相互作用による表現物、その時代の価値観や考えを反映したものであると言える。また、漫画そのものを資料として用いるため、過去にさかのぼってその変遷を見ることも可能になると考えている。

もう一つの学術的背景としては、批判経営学(CMS: Critical Management Studies)の観点からである。ポップカルチャーから批評という点である。近年、統計資料やインタビューデータによらず、社会批評的なアプローチによって、様々なメディア媒体から組織や経営のあり方を探る試みが確立されつつある。例えば、英国における組織論の学術誌である「Organization」誌は、2008年９月にSpecial IssueとしてImages of Organizing in Popular Cultureを特集している。これらの試みはまだ日本のみならず組織論、組織行動論の研究において大きな分野とは言えないが、これまでの組織論、組織行動論の視点とは異なる視点を提供する可能性を持つと考えられる。本研究は、このような新しい経営学のアプローチの可能性を拡大する試みとも考えている。実際に研究においては、単純にマンガから読み取れることを分析するだけでなく、なぜ多くの人にこのような描写が受け入れられるのかといった点から分析することで、既存研究や経営学の学問体系に対する批判的な検討も行う。

本研究は、日本企業において、会社と個人の関係や働き方の規範はいかに変遷してきたのか、を明らかにすることであり、この問いを漫画という媒体への批評を通して明らかにすることが本研究の目的である。

２．研究の目的

本研究は、ポップカルチャーの一つである漫画の批評(critique)を通して、近年の日本的経営特に組織と個人の関係について、その変遷を考察することである。またこれらの考察を通して、公開されている漫画や出版物、写真史料、映画などポップカルチャーに止まらず、言語データ以外の二次資料の批評的分析を通して現代日本企業の様相を明らかにするアプローチを確立する。上記課題は、学術研究のみならずジャーナリズムでも議論があるが、それらは統計的なデータや経験的なエピソードから導き出されたものが多い。本研究では、漫画を社会の鏡と捉え、そこに描かれるものを通して、上記課題を深層面から明らかにする。

高度成長期から日本企業が大きく躍進を遂げた時代には、その躍進の一つのファクターとして、日本企業の従業員の特徴的な組織との関係が多く取り上げられた。しかし近年、日本企業をめぐる組織と個人の関係は、グローバル化、少子高齢化、女性の社会進出を受け、多様なものになっている経験的事実がある。本研究では、この近年の多様な日本人従業員の組織と個人の関係の捉え方とその変遷を、漫画の批評を通して明らかにすると同時に、漫画を始めとするポップカルチャーから現代日本企業の様相を明らかにするアプローチの確立を目指す。

３．研究の方法

研究期間内においては次の２つの点を明らかにしようと考えている。１つは，漫画を対象とした継時的な分析から日本企業とそこで働く人々の関係の変遷を明らかにする。具体的にはさらに３つの点に焦点を当てる。１つは、仕事の中心性に関してである。高度成長期の日本企業では、仕事中心の生活を送る日本人従業員が想定されていた。昨今ワークライフバランスが強調される中、日本人従業員の考え方や価値観も変わってきた。この点を明らかにする。２つめは、ダイバーシティマネジメントに関してである。同じく高度成長期の日本企業では、職場は男性の日本人正社員が中心であった。その点は変わらないものの、女性の社会進出や企業のグローバル化、

そして定年の延長など職場には多様な背景をもった人がそれぞれを尊重しつつ仕事を行うことが求められるようになってきたと見られる。このような日本人従業員のダイバーシティをめぐる価値観についても明らかにする。最後に、日本人のキャリアについても漫画を通じて、その変遷を明らかにする。以前の日本においては、終身雇用制度と言われるように、１つの企業に属し続けるということが価値観であった。キャリアの多様化が進む中、各人の専門性、将来のキャリア構築など、キャリアに関わる考え方も変遷している。この点についてもこのアプローチによって明らかにしていく。

具体的な研究計画としては下記３つの点から前述について研究を進めた。

（1）文献・方法論研究

二次資料から社会の価値観や考え方を分析するアプローチとして、これまでの批判経営学を中心とした研究に関して文献渉猟を行う。これまでのこのアプローチに基づく研究成果を整理することと、アプローチそのものに関する文献を渉猟し、実際の分析のための方法論の整備を行う。この点に関しては、研究協力者（Naoko Komori 氏（シェフィールド大学））を招聘することなどを通して、この分野における知見を得ることで、30 年度以降の調査ならびに分析の準備を行う。また、二次資料の分析の１つとして内容分析の可能性を検討する。具体的には高田（2010）を始めとする物語構造分析の手法と定量化のアプローチとしてのテキストマイニング、歴史的資料などに用いられる画像資料論（例えば吉田（2014））についても分析手法としての可能性を検討する。上記方法論の検討に加え、二次資料の収集、検討を行う。仕事に関わる漫画を広範に検討し、分析対象とするものを選んでいく。日本においては源氏鶏太をはじめ多くのサラリーマン小説が著され、戦後のサラリーマンイメージを作り上げたこれらの著作についても研究対象として可能かどうか検討を行う。

（2）漫画並びに漫画産業の実態調査

漫画業界に関する実態調査に関しては、同じく分担研究者である松本と山下が行う。具体的には、これまでのすでに進めている漫画編集者や漫画業界へのインタビューを通じて、漫画業界の現状と漫画を制作する点について明らかにすることで、漫画と日本社会の関係についての洞察を得ることを目的とする。また将来的な国際発表においては、日本社会における漫画の位置づけについても情報が必要になることから、広く漫画業界に関する統計的データを渉猟し、日本における漫画の位置づけの変遷ならびに現状について整理を行う。あわせて分析に用いる資料についての渉猟を漫画のみならず小説、映画などから行う。

（3） 漫画分析

（1）の文献研究ならびに方法論の整備を踏まえて、研究後半においては実際に分析を行い、それらの結果に関して、国内外での発表・論文の執筆を行う。具体的には、まず、収集した資料への物語構造分析、テキストマイニング、ならびに画像資料分析をパイロット分析として研究目的への接近とともに方法論の可能性を探る。

その後、パイロット分析を踏まえた分析を大規模な資料を対象に行う。具体的には、3 つの課題をもって分析を行う予定である。1 つは、英国ですでに発表された日本のサラリーマン漫画を題材にした先行研究（Matanle, McCann, & Ashmore, (2008)）と同じ漫画を用いた構造分析を行うことで、先行研究の批判的検討を試みる。２つ目に、長期にわたって連載されたサラリーマン漫画の物語構造分析および内容分析、ならびにサラリーマンを題材にした映画の画像分析を行うことで、日本人の働き方、あるいは組織と個人の関係に関する価値観の変遷を分析する。最後に、代表的な日本企業（例：パナソニック）の画像アーカイブを分析し、写真史料などから、同様に日本人の働き方、あるいは組織と個人の関係に関する価値観や考え方の変遷を分析する。

【参考文献】

Matanle, P., Mccann, L. & Ashmore, D., 2008. “Men Under Pressure : Representations of the “ Salaryman ” and his Organization in Japanese Manga.” Organization, 15(5), pp.639-664.
高田明典著（2010）『物語構造分析の理論と技法：CM・アニメ・コミック分析を例として』大学教育出版.
吉田ゆりこ・八尾師誠・千葉敏之編（2014）『画像資料論』東京外国語大学出版会.

４．研究成果

2018 年度においては、主に資料の収集・整理と分析における既存研究の整理を行い、次の 3 つの点での研究成果があった。１つは、既存研究の整理として、漫画などの画像資料の分析方法とポップカルチャーを取り扱う上での分析視角に関する検討を行った。また、画像資料など分析方法については、すでにある程度分析方法が確立されている歴史的画像の史料分析の検討を行うとともに、ポップカルチャーを対象とした実験的な研究論文を渉猟し、分析方法について検討を行った。また試論的な分析を行い、いくつかの漫画（「重版出来」「バンビーノ」など）を取り上げ、分析を行った。

2 つめにポップカルチャーのうちサラリーマン漫画に焦点を絞り、それらの資料を収集・整理を行った。具体的には網羅的に検索した上で資料を収集するとともに、（学術的ではないが）先行

する漫画に関する書籍などを参考に、収集すべき資料について検討した。漫画資料に関しては、データベースを構築し、文献を整理するとともに、長期連載が続いている特定のサラリーマン漫画（「島耕作シリーズ」「なぜか笑介シリーズ」「総務課・山口六平太」）を主に取り上げ、資料の読み込みを行った。また、これら長期連載をされたいわゆる王道的なサラリーマン漫画に対し、サブカルチャーを形成するいくつかの漫画、具体的には社畜漫画と呼ばれる、サラリーマン社会の負の部分や王道漫画では触れられることのないサラリーマン社会について積極的にストーリーに取り込んでいる漫画、についても資料を収集し、読み込みを始めた。
3 つめに、上記以外の研究の成果として、組織と個人の関係において、近年着目されている非倫理的な組織行動についても既存研究の整理を行い、これについては共同論文を公刊した。また、漫画の教育的な利用についての検討として、研究論文の公刊を行った。

2019 年度における研究業績について以下の 2 点から述べる。まず 1 つ目に、前年度に引き続き、資料の分析と検討を行い、サラリーマンマンガにおける分析視角を見出し、それぞれが分析をより具体的に進めることとした。それらは以下の 4 点である。
（1） マンガ分析の経営学的研究方法
（2） 日本における社会とマンガの関係性
（3） 日本のマンガ産業の構造
（4） サラリーマンマンガの変遷
（1）から（2）に関しては、すでに資料や文献の検討が終わり、ディスカッションペーパーレベルでの研究成果が得られている。また（3）に関しても 2018 年度以前に行われたインタビュー調査の分析が概ね終わった段階である。（4）に関しては、資料の分析が終わり、すでにディスカッションペーパーが公刊されている（業績としては未公刊）。（1）と（2）は、主に文化評論や社会学で行われてきたサブカルチャーの研究を踏まえ、マンガを経営学的な研究のデータとして用いる際の問題点や可能性について検討したものである。（3）はその背景にある日本の雑誌とコミックスの構造、また近年のネット配信による産業構造の変化について論じている。（4）は、戦後のサラリーマンマンガのレビューとともに、キャリアにおける成功と会社や仕事の考え方についての変遷を分析している。2 つ目に、本研究が背景とする組織行動論や経営組織論についての日本人を対象とした研究である。2019 年度は、組織行動論全般に関する書籍とキャリアに関する論文、実践的共同体に関する論文の 3 点について、近年の研究動向の検討とフィールドワークを踏まえ、書籍ならびに論文を公刊し、海外での発表を行った。
20 年度は主にこれまでの研究の論文化が進められた。その結果、予定していたマンガメディアの構造の分析、マンガを分析する方法については論文がほぼ完成した。これらの論文は現時点では、いずれもディスカッションペーパーの形で出版している。一方、サラリーマンを対象とした青年誌の分析と女性の働き手に着目した分析については、研究チームでの議論の結果、他のテーマでのアプローチに変更することとした。その 1 つであるマンガ日本人の労働エートスに関する研究についてはほぼ完成のところまでたどり着いている。また、学習に関する研究、モチベーションに関する研究についても準備が進められ、21 年度の論文化を目指している。具体的には、労働エートスに関する研究に関しては、物づくりに関わる 5 つのマンガを取り上げ、ウェーバーのエートス論を敷衍した尾高の論考をベースに労働エートスとしての勤勉の類型について検討した。またそれらの労働エートス が、商業主義や合理主義に侵されやすく、その結果、尾高の示した勤勉性の労働エートス の 1 つの派生として、制約のある中での最善を尽くすというエートスも存在することを示した。次に、モチベーションの研究に関しては、天職ややりがいといったポジティブな概念がマンガからも見出されると同時に、テキストなどでは取り扱わない多様なモチベーションの姿を見出した。最後に、学習については職人世界のまんがを通して、日本特有の学びについてその身体性と精神性の観点から分析を始めている。
21 年度は、20 年度に引き続き、主としてマンガのデータの分析をもとに研究を進めた。具体的には下記のテーマで分析と研究を進めた。
若手サラリーマンが仕事マンガから学んだこと
バブル期の日本において、学校から職場への移行を控えた学生・生徒たちや、就業直後の若手サラリーマンたちが、仕事マンガから何を学んでいたのかについて、『なぜか笑介』（聖日出夫）の内容分析にもとづいた議論を行った。そこからはやはりがむしゃらに働くことが是とされていることや、人事やシャドウワークの重要性が描かれていることが示された。
実践共同体に関する論考
「夏子の酒」「あんどーなつ」から、実践共同体の機能と役割について分析を行い、実践共同体の研究ではあまり触れられてこなかった実践共同体への参加あるいは参加への阻害の要因についての示唆を得た。具体的なエピソードを含むマンガにおいては、既存の研究では見過ごされてきた側面をエピソードの中で表現することもあり、マンガ研究を通じて既存研究の盲点を見ることも本研究の含意として得られている。
上記 2 つの主たる分析に加え、マンガに対する考え方や本研究がフォーカスしている仕事マンガの購読状況などについての質問紙調査を行なった。このデータの分析については 2022 年以降の課題として考えている。当初予定していた海外での報告や研究打ち合わせはコロナ禍のため中止をし、Zoom などのテレビ会議で代替した。

22 年度は、21 年度に収集された質問紙調査の分析と引き続きマンガの分析からの研究の論文化が進められた。結果として、2つの論考が完成し、これまでの論考とあわせて書籍の準備がほぼできた。具体的には、次の論考がある。

社畜に関する論考

この 10 年の間に、社畜マンガというジャンルが確立しつつある。そこでは社畜と呼ばれるような会社や仕事に自分の時間のほとんどを費やす仕事人が描かれるが、一方でその描き方は揶揄的あるいは喜劇的に捉えられている。しかし分析を通じて、社畜マンガは過剰労働やブラックな環境を否定するだけではなく、そのように働くことを当たり前に思う姿を示し、経営上の問題意識を提示することが述べられる。

コメディに関する論考

いくつかの社畜マンガのように、コメディタッチで描く仕事・サラリーマンマンガも近年多い。コメディは何か常識的に思われていることがひっくり返されることでコメディとして成立することを踏まえれば、分析を通じて日本企業や日本人労働者が見る日本の企業の常識を見ることができる。本論考では、「無能の鷹」「明日クビになりそう」の 2 つのマンガから、ビジネスにおける表層的な有能性の存在、言われたことをきちっとするということが評価されるという常識が日本企業にはあることが示された。

これら以外にも、質問紙調査の分析やマンガの内容分析なども行われ、いずれも論文化が進められている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 松本雄一	４．巻 70(1/2)
２．論文標題 サードプレイス概念の先行研究の検討 ： 実践共同体との関連についての考察	５．発行年 2022年
３．雑誌名 関西学院大学商学研究会『商学論究』	６．最初と最後の頁 75-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuichi Matsumoto	４．巻 22
２．論文標題 The Function and Role of Communities of Practice in the Case of Working Manga	５．発行年 2022年
３．雑誌名 International Review of Business	６．最初と最後の頁 1～23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yuichi Matsumoto,Hiroki Kasamatsu & Masayuki Sakakibara	４．巻 78(8)
２．論文標題 Challenges in Forming Transdisciplinary Communities of Practice for Solving Environmental Problems in Developing Countries	５．発行年 2022年
３．雑誌名 World Futures	６．最初と最後の頁 546～565
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/02604027.2021.2012878	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 北居明・上野山達哉	４．巻 2021(3)
２．論文標題 「働きがい」をめぐるジレンマとアイロニー ： 「働きマン」たちそれぞれの事情	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Discussion Paper New Series, School of Economics Osaka Prefecture University	６．最初と最後の頁 1～22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24729/00017470	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuichi Matsumoto	４．巻 21
２．論文標題 What Do Working Manga Reflect about Society?	５．発行年 2021年
３．雑誌名 International Review of Business	６．最初と最後の頁 1～26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 北居明	４．巻 61（3・4）
２．論文標題 マンガ研究におけるアプローチの類型化の試み－仕事や組織を描いたマンガを中心に－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 甲南経営研究	６．最初と最後の頁 129～159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鈴木竜太	４．巻 2021・05
２．論文標題 お仕事漫画から見る日本人の労働エートスの研究	５．発行年 2021年
３．雑誌名 神戸大学経営学研究科ディスカッションペーパー	６．最初と最後の頁 --
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 市村陽亮・鈴木竜太	４．巻 －
２．論文標題 地域でつくるキャリアの新しいカタチ（第2章）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 山口隆英・鴨谷香 編著、神戸大学出版会『地域づくりの基礎知識５　働き方とイノベーション』	６．最初と最後の頁 25-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松本雄一	4．巻 67(3)
2．論文標題 実学集合型実践共同体の概念的検討	5．発行年 2020年
3．雑誌名 商学論究	6．最初と最後の頁 21-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松本雄一	4．巻 66(3)
2．論文標題 自己調整学習と実践共同体	5．発行年 2019年
3．雑誌名 関西学院大学商学研究会『商学論究』	6．最初と最後の頁 349-383
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 北居明・鈴木竜太・上野山達哉・松本雄一	4．巻 52(2)
2．論文標題 「組織のため」の罠：非倫理的向組織行動研究の展開と課題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 組織科学	6．最初と最後の頁 18-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yuichi Matsumoto	4．巻 18
2．論文標題 A Study of the Suitability of Japanese "Working Manga" as a Business Case Study	5．発行年 2018年
3．雑誌名 International Review of Business	6．最初と最後の頁 29-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松本雄一	4．巻 16
2．論文標題 実践共同体の『二次的意義』の探求―介護施設事例の活動理論的分析をもとにして―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ナレッジ・マネジメント研究	6．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松本雄一	4．巻 41
2．論文標題 実践共同体構築による学習促進の事例研究―非規範的視点と越境を中心に―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本経営学会誌	6．最初と最後の頁 52-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　4件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 松本雄一
2．発表標題 実践共同体から見るナレッジ・マネジメントの未来
3．学会等名 日本ナレッジ・マネジメント学会 第25回年次大会（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 松本雄一
2．発表標題 仕事漫画を経営学研究に用いるということ
3．学会等名 経営行動科学学会第24回年次大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 鈴木竜太
２．発表標題 仕事漫画とサラリーマン漫画の変遷
３．学会等名 経営行動科学学会第24回年次大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 上野山達哉
２．発表標題 「働きがい」をめぐる機微：「働きマン」たちの事例をもとに
３．学会等名 経営行動科学学会第24回年次大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 松本雄一
２．発表標題 実践共同体の学習
３．学会等名 日本経営学会第95回大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 鈴木竜太
２．発表標題 ローカルな研究の可能性-経営学研究におけるグローバルとローカル-
３．学会等名 第94回日本経営学会全国大会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 松本雄一
２．発表標題 AI 時代の人材育成：学びのコミュニティの観点から
３．学会等名 日本経営学会第93回大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yuichi Matsumoto
２．発表標題 Boundary crossing and collaborative learning in communities of practise: Using SAIDO Learning in Japanese nursing homes
３．学会等名 European Group for Organizational Studies, 35th EGOS Colloquium, Edinburgh 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 松本雄一
２．発表標題 Boundary crossing and knowledge creation in communities of practice: Case study on using the SAIDO-learning approach in Japanese nursing homes
３．学会等名 European Group for Organizational Studies 34th EGOS Colloquium（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計9件

１．著者名 松本雄一	４．発行年 2023年
２．出版社 同文舘出版	５．総ページ数 220
３．書名 ベーシックテキスト 人材マネジメント論 Lite	

１．著者名 鈴木竜太・西尾久美子・谷口智彦	４．発行年 2023年
２．出版社 碩学社	５．総ページ数 256
３．書名 １からのキャリア・マネジメント	

１．著者名 加護野忠男・吉村典久・稲葉祐之・三上磨知・小林崇秀・河合篤男・團泰雄・松本雄一・真鍋誠司・石井真一・趙 怡純・加藤敬太	４．発行年 2021年
２．出版社 碩学社	５．総ページ数 244
３．書名 新しいビジネスをつくる 会社を生みだし成長させる経営学	

１．著者名 加護野忠男・吉村典久（編著）三上磨知・松本雄一・小林崇秀・井上達彦・真鍋誠司・石井真一・稲葉祐久・河合篤男・出口将人・曽根秀一・竹田明弘（著）	４．発行年 2021年
２．出版社 発行=碩学舎、発売=中央経済社	５．総ページ数 312
３．書名 1からの経営学<第3版>	

１．著者名 北居明・鈴木竜太・上野山達哉・島田善道・松本雄一	４．発行年 2020年
２．出版社 八千代出版	５．総ページ数 176
３．書名 経営学ファーストステップ	

１．著者名 鈴木竜太・服部泰宏	４．発行年 2019年
２．出版社 有斐閣	５．総ページ数 290
３．書名 組織行動	

１．著者名 松本雄一	４．発行年 2019年
２．出版社 白桃書房	５．総ページ数 328
３．書名 実践共同体の学習	

１．著者名 開本浩矢・高階利徳・鈴木竜太・上野山達哉・櫻田涼子・原口恭彦・加納郁也・井川浩輔・小野善生・松本雄一・厨子直之・北居明・尾形真実哉・團泰雄・三崎秀央	４．発行年 2019年
２．出版社 中央経済社	５．総ページ数 272
３．書名 組織行動論（ベーシック+）	

１．著者名 ユーリア・エンゲストローム(著)，山住勝広（監訳），松本雄一・山口武志・吉澤剛・長津十・田原敬一郎(訳)	４．発行年 2018年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 288
３．書名 拡張的学習の挑戦と可能性：いまだにここにないものを学ぶ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	松本　雄一 (MATSUMOTO Yuichi) (10336951)	関西学院大学・商学部・教授 (34504)	
研究分担者	北居　明 (KITAI Akira) (30278551)	甲南大学・経営学部・教授 (34506)	
研究分担者	上野山　達哉 (UENOYAMA Tatsuya) (90323188)	大阪公立大学・大学院経営学研究科　・教授 (24405)	2022年4月1日より、大阪府立大学・経済学研究科・准教授

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関